
人間になったアバドン

ひらがな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間になったアバドン

【NZコード】

N9701R

【作者名】

ひらがな

【あらすじ】

改稿を終えました。変わっていないかも知れません。話が大幅に変わりました。5番目のお知らせはまた変えますので、気にしないでください。この話は、劣等感のあるペルソナであったアバドンが女体化して、そして人間になり、色々と変える話です。

1 再スタート（前書き）

はじめまして、ひらがなと申します。

この話はもしも主人公達のペルソナが主人公だつたら・・・的な話です。

ちゃんと元の主人公もいますが、オリジナル主人公視点が多いかもしれませんので、あらかじめご注意ください。

1 再スタート

四月六日、ターミナル駅、夕暮れ。駅前は多くの人でにぎわっている。

ターミナル駅の夕暮れはあまり綺麗ではない。土地開発が進みすぎてしまつた様だ。黒い煙が空を汚してしまつてゐる様に見え、有里湊は落胆の息を吐いた。

湊は公子をちらりと見やる。公子は氣分屋で、そして天然だ。誰よりも真っ直ぐの純粹な心を持ち、美しい容貌をしている。時折見せる公子の心の傷は、とても男心くすぐられるのだろうと思つ。それ故に湊はかなりの苦労を強いられてきた。

この先の学校でもやつていけるのだろうか。湊は薄くくべもつた空を見やり、大きなため息をはいた。

公子と湊は双子だ。公子も湊も負けず劣らず真っ直ぐな心を持ち、美しく、そして

考慮深い。前の学校では有名だったのだろうと思われる一人だ。

駅での事故、乗車を経て彼らは改札口を出る。

そうしたとたんに周囲の電気が電源を落としたよつて切れ、壁が薄緑に染まつた。

なんだ、と彼らは空を見やれば、異様に大きく、黄色に発光した月が目の前にあつた。公子はあつ、と声を一瞬あげ、360度の景色を一望してから

「氣のせいだよ。行こう」と声を湊に掛ける。湊は会釈で返事をした。公子の声は震えていた。

彼らの間での会話は無い。そのような氣分には至らなかつたからだ。歩いていくと、赤い血だまりが広がつてしたり、いつの間にできた建物の割れ目

から赤い何かが流れ出でいた。スクランブル交差点には多数のオブジェが並び、

それがまた不気味で、触つてみようといつよつ好奇心よりも先に、ここから

出て行きたいといつ心一心で彼らの足取りは自然と速くなる。

時計を見れば、零時を回つていた。

巖戸台分寮も、とても不気味だつた。窓にへばりつて草花に、階段に放置

されているだらう飲み食いの跡。ホテルを改装したようなモダンな雰囲気が、

不気味さをまた強く押し出していた。

ギシギシと黒板を引ついた様な堅く重い扉を開ける。大きな窓の桟からは

月の光が漏れ、薄暗く室内を照らしていた。窓にへばりついた草の

影が、

床のカーペットに映し出され、悪魔が笑っているように思えた。彼らはただでさえ大きい目を大きく見開いた。

「遅かったね。長い間気味を待つっていたよ」

囚人服を可憐に着こなした少年が彼らの眼下に居る。髪は青く、そして色白で、病的な雰囲気が醸しだされていた。くつくつと大きい目で一人の姿を上から

下まで確認すると、少年はまた口を開く。

「この先に通りたいなら、まずはここに置かなくて。でないと、入れないよ」

いたずらっぽく少年は笑つ。

彼らは間もなくして署名をした。怪しい雰囲気だとは思つたが、子どもを疑つ

気分には慣れなかつたという事や、先ほどの奇怪現象による疲れ、そして何より

少年の余裕を絶やさない笑みが反論する気持ちを萎縮させた。

「うん、文字も合つてゐる。じゃあ、がんばろ?」

少年は、闇に溶けるように消えた。

「あなた達、誰!?」

休憩する間も無しに、彼らの疲れは倍増した。このような事態にももう驚かない。

薄暗い室内に細いシルエットが移つた。少女の体は揺れ、髪の毛は

左右に跳ねている。

「まさか・・・・・・もしかして」

ソプラノの様な音が使命感を背負つていてるよつに聞こえる。

「待て！」

よく通る声だと彼らは思った。少女の後ろから上品に体を動かす少女のシルエットが見える。大人の様に気品に溢れているのがシルエットだけでも分かつた。

室内の明かりが点き、彼らの姿が露になつた。一人の男に三人の少女。

彼らは両者とも動搖している様で、目をせわしなく動かしていた。

「君達は転入生だね？ 有里湊に、有里公子。合つてるか？」
気品ある少女に訊かれ、軽く会釈をして返事をする。

「私は桐条美鶴。この寮を管理している者だ。そしてこちらは・・・
・・・」

「岳羽です」

合わせたように茶髪の少女が湊らに会釈をした。両者とも会釈を返す。

何気ない会話が続き、岳羽という少女に一人が案内される形となる。岳羽は先ほどの怪奇現象や自分達の事は他の人に口添えしないようにと釘を刺し、
ラウンジへと戻つていく。

疲れた彼らは、ベットに伏して間もなく眠りについた。

1 再スタート（後書き）

「指摘があればよろしくお願ひします。」

今回からオリジナル主人公の登場となります
文の構成や展開がおかしいです。

私が起きたのは4月6日の電車内だった。窓から垣間見える景色は、整理され

た生氣の無い住宅街と、排氣ガスを垂れ流す工場しか見えなかつた。状況を把握する為に、私は首を動かしながら左右を見た。首の骨がぽきぽきと音

を鳴らし、それがとても痛かつた。ちりぢりに座つてゐる人達からは、残業後の

疲れと落胆、失望が見て取れた。目は隈があり、背は曲がつてゐる。私は席を立たなかつた。自分の体を動かせるだけ動かした。腕を振つてみたり、

足を動かしたり、最初は痛くて我慢ならなかつたが、しだいに慣れてくれる、

スムーズに運動が出来るくらいにまで上達した。

そんな奇怪な動きをする自分にも関わらず、回りの人々は虚ろ気な顔をしましたまゝ動かなかつた。

電車内の少し効きすぎた冷機が、私の足を冷やしてくれて、とても気持ちが良かつた。

電車が止まる。おり始めるサラリーマンを見て、私も釣られて下車した。

黒く染まつた空を照らす蛍光灯も、虫が集つていて、命絶え絶えな感じの物

もあり、それがまた疲れた感じがして、私は少し気分がしづむ。

それにもしても、ここは何処なのだろうか。地に足を着けた私は、そ

んな事を

疑問に思つた。いつもは、彼らの中じつと縮こまつてゐるのに。

+

「ほづら、アバandon。獲つてみろよ」

「ダメ、だめだから。それはだめだから!」

「アバandon。肩揉めよ肩。ほづら、やつととやれー。」

「はい・・・・・・・」

「お前力だけはあるんだな!ツブ」

「おま・・・・・・・」

私は彼らの中ですつとこを使われてきた。いい加減せいせいしていった。

持ち主である彼らの前では賢く動くのと、ざつしてこんなに陰湿なんだろ?と

思い、気持ちが弾む事は無かつた。そつだ、私はアバandonだ。容姿の事でさんざん馬鹿にされ続けた。おまけに体力消費の多い技ばかりの私は、

あまり重宝されず、底辺生活を送つていた次第である。

彼らが大いなる封印を終え、私達の役目ももつ終わったと思つていた頃、

彼らの記憶を戻す好機が現れた。それは私達の持ち主である者の封印の日でも

あつた事は私達にも勘付いたこともあつたかも知れない。

そうなることも、私達ペルソナは知つていたのだと思つ。

（ヤバイ！大事な知らせだ！このままじゃ主人達が消滅する！）

一人が何を聞きつけたのかは知らないが、そう叫んだ。

（大丈夫だ。俺は良い案持つてゐるぞ。俺達が念じるんだ。最後の封印される力

はまだ主人らは持つてゐる。そしてだ、俺らペルソナは主人と裏表一体だ。

何を云えばいいのか分かるな？）

一人が暗い声で言い放つと、

（分かつた！主人達が生きる事を望めばいいんだ！それを僕達が望めば！）

一人が高い声で言う。

（（（（（それか！）））））

（ちょっと待つてよ、主人達は望んでないんじゃないの？そんなことしたら

苦労が水の泡だよ・・・・・・）

オルフェウスが反対するが、意氣込む彼らの前では太刀打ちできない。

私は、何も言わなかつた。

+

そんな事があつたような気がした。だから、私がこんな所に着たのか。

そう考へると合点がついて、スッキリしたような感じもする。

またとたんに罪悪感が湧いてきた。彼らの苦労が水の泡なのではないか。

オルフェウスの云つた通りだと思つ。私は申し訳なく思いながら地
を歩いて
いく。生ぬるい風が気持ち悪く頬に残つた。

3

(突然の出来事) (前書き)

改善していくべきことは改善していくべきだと思います。

5月9日改稿しました。

強い月の光に目を萎ませながら田を開けた。良くも悪くも、私は人間になり、生活していかなければならぬようだった。

急に街の雰囲気が変わる。――影時間だ。私はすぐにそう思った。

忌まわしい時間の忌まわしい記憶が蘇る。そんな嫌な気持ちを振りだす様に私は首を振った。威厳に満ちた月、地形が変形してしまった駅。そしてオブジェ

になる人々。何時見ても、一瞬は困惑してしまうこの風景。

私は向かう先をタルタロスに決めた。理由は、なんとなく、でしか無い。

私は脱兎の如く走りだした。景色が移り変わりするが、無機質な建物達は変わりない様に思える。

必死をこいて学園前に来たものの、早々に息が上がった。建物を押し固め、

そして建て増しを繰り返した様な塔、タルタロスの上には威張るよう月が

君臨していた。門を飛び越し、タルタロス内へと入る。傷一つ無い

踏みならし、階段を超えると、大きい門がある。私はその門を静かに開け、

タルタロスの地へと降り立つた。一、二階であれば、そう苦労はし

ないと、私は

少し甘く見て、意氣揚々とシャドウに立ち向かう。

千切つては投げ、千切つては投げの繰り返しだった。アタッショケースから取り出した

薙刀やら剣やらをシャドウに恨めしく投げつける。用途は違うが、この方が何倍も効率は良い。

数分した所で息が上がり、私はタルタロスから出た。影時間が終まるまで私はそこにいつづけ、タルタロスが平然とした学校に戻る様はとても恐ろしい。

タルタロスがぱっかりと割れ目を付け、そこから学校が組みなおしされる。タルタロスの破片は学校の一部一部に修正され、なんの変哲も無い学校になつた。

私はそのまま転寝をうち、草木の陰に隠れて眠つてしまつた。誰かに見られたらとても恥ずかしいが、今は気にしない事とする。それよりも、眠るのつて気持ちが良い！

3

(突然の出来事) (後書き)

改稿させていただきました。
かなり短くなつてしましました。

4 アルバイト（前書き）

改稿しました。

4 アルバイト

閑散とした住宅街を抜けると、そこに月光館学園巖戸台分寮がある。どうやらまだ朝早くの様で、時折スース姿のサラリーマンは見かけ
るが、

学生の姿は見られなかつた。手元にある時計を見やれば、指針は5時30分と指して
いた。どうやら来る時を間違えた様だ。私は寮を見上げながら、誰にも気づかれない
様にほつとため息をはいた。

私が人間になつてからおよそ1日目だ。さわやかな風がこんなに気
持ち良いもの
とは思わなかつた。睡眠はあまりとらず、何となくこの寮を田指し
散策していた
ら、あつたと云う訳である。そろそろ腹が減つてしまつた。何とか
して金を
見つけないとならない様で、私の心は焦りで満たされてしまう。

近くに置いてあつた食いさしのたこ焼きを啄ばみながら、私は求人
を求め、
また閑散とした住宅街を戻つていつた。

=====

「んで、この仕事に就きたいという訳かい？」

「はい。お願いします」

「んじや分かつたよ。取り敢えず日雇いって事で良いよな」

「ありがとうございます」

私は澤田と名乗る男を尊敬の眼差しで見やつた。どうやら私が食糧不足で倒れて居た所をこの男が拾つてくれたからしかつた。水はもううわ、たこ焼きも貰うわで

私は安心した気持ちになれた。そして澤田さんに対する感謝を色々と述べ、自分
が今とても困っていると表現すれば、日雇いアルバイトとして雇つ
てくれる様に
してくれたという訳である。

澤田さんは大工らしく、その職場を仕切る権力者らしい。風貌は地黒の肌に逞しい二の腕、そしてごつごつと骨ばった体。私が彼らの中で見てきた中で最も男らしい男といえる人だった。

私は木材運びをすることになり、近くの工場から肩に長い木材を掛け、現場まで往復したり、食料を買いに行ったり、と色々とこきを遣わされていた。

空が赤く染まり、水色と赤のコントラストが美しく映えた頃、一時
休憩となり、
私は汗だくで近くの出っ張った岩に腰掛けた。じつじつしてとても
痛かったが、
しごいてきた足がとても痛み、それを気にする所では無い事を悟つ
た。

「お疲れさん。アルバイトの人」

澤田さんに声を掛けられる。両手には缶珈琲を持ち、そのうの一
つを私に
差し出してくれた。どうやら働いた餞別の様だった。ありがた
く思い
受け取り、私はそれを水のように流し込む。苦い味がして吐きそう
になつた
が、気にしなかつた。

「いい働きっぷりだ。明日も頼むな」

澤田さんは片頬を上げ、にやりと笑つた。私は明日もじごかれるの
だと絶望
と、明日も働けるのだと感謝の意を澤田さんに送る。
空が夕闇に暮れるまで、私は澤田さんや他の人にじごかれ続け、働
き続けた。
汗が作業着にべつたりとびりつく。手元にあつたタオルはとても
汗臭かつた。

=====

手取り1万円。なかなかの高収入だった。コンビニドリンク上げ寸前の安い弁当
を買い、私はそれに貪りつく様に食べた。働いたという達成感があり、私の
心の中はアドレナリンに包まれる。汗が乾き、体温が下がる事によ
つて、
眠気に襲われた。

おやすみなさい。

＝＝＝＝＝

彼女が必死で仕事を探している最中、私立月光館学園は始業式だつた。

有里兄妹は両者とも同じ組となり、ゆかりや順平と戯れた。

ただ唯一、彼らの心にはしきりが残っていたが、彼ら自身もその事には気づかなかつた。

4 アルバイト（後書き）

澤田さんは物語と何の関係もありません。

改稿中の事についてです。（前書き）

改稿中です。申し訳ありません。

改稿中の事についてです。

4話のみですが、改稿させていただいております。大まかな流れは変わりありませんが、

オリジナル主人公の名前が付くところ等が無しになっています。

前話と次話の話の進み方が違うところがあります。そこも改稿していきたいと思っています。

色々と話が変わってしまったので、矛盾点が増えるかもしれません。

改稿が終わり次第、次も書いていきます。

改稿中も小説を覗いて下さった方等もいるかと思います。

とてもうれしかったです。ありがとうございます。

改稿中ですので、変えたと思ったらまた変わることもあります。

予めご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9701r/>

人間になったアバドン

2011年10月8日22時05分発行